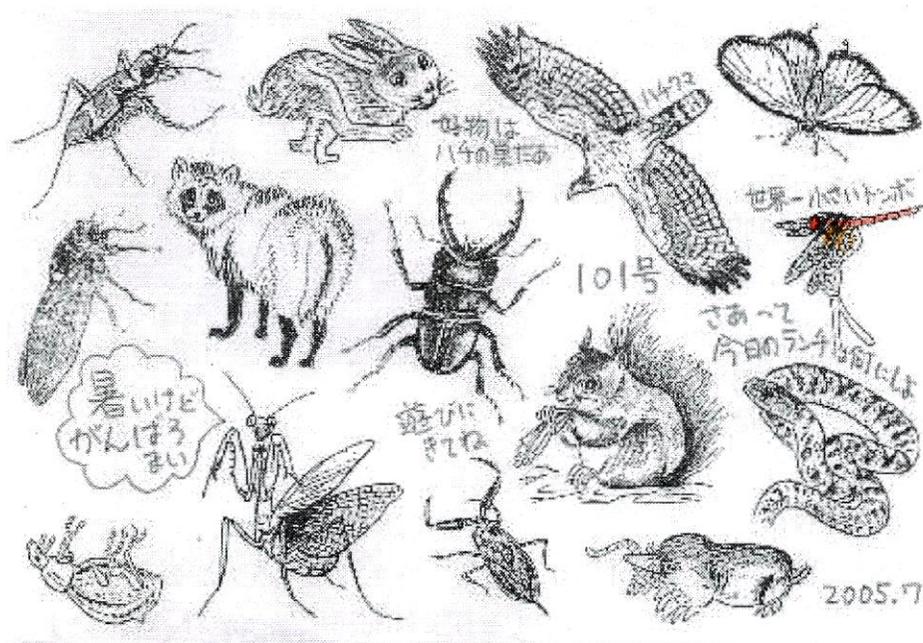


協議会ニュース 101号

愛知県自然観察指導員連絡協議会 2005. 7



『里山の仲間たち』

●特集 「陸産貝類研修会」	P2~4
レポート	大谷 敏和	
資料(講師)	中根 吉夫	
・会員のページ	知多支部P5
・観察会のネタ	竹内 秀代P6
・観察会あれこれ	高谷 昌志P7
・豊かな自然セレクション 100	牧野 紀子P8
「相生山緑地」	近藤 記巳子P9
・協議会だより	P10
・理事会だより	P11
・事務局だより	P12
・編集部だより・行事予定 他	

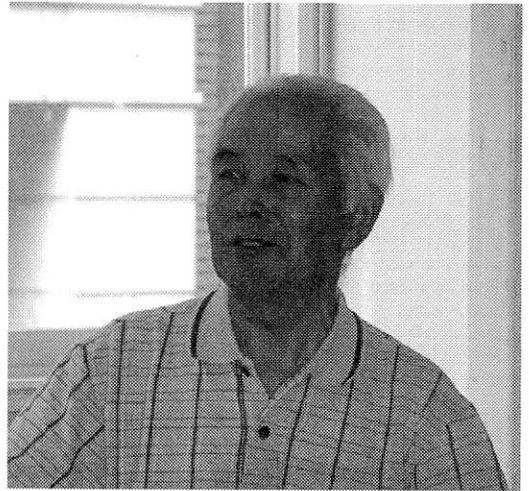
陸産貝類（かたつむり）研修会

5月29日 教育館にて

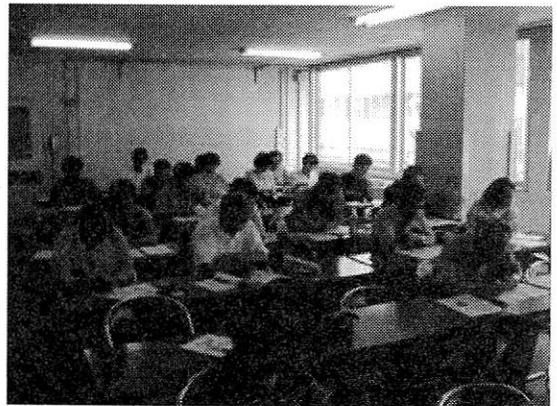
講師 中根 吉夫 氏

報告：尾張支部 大谷 敏和

当日参加者は、名古屋支部9名、尾張支部9名、知多支部2名、奥三河、東三河、西三河支部各1名、一般1名の合計24名の参加があった。協議会研修会で20名を超えるとスタッフ一同活動の盛り上がりにはホッとするものであるが、それ以上に各支部から1名以上の参加があったことはとても意義深い。県内各地からカタツムリ・ダンゴムシのサンプルが集まってくるのではないかと、という期待がもてる。陸貝は移動速度が遅く、様々な環境を自由に移動できないので、環境が隔離されると地域格差がでるといふ。しかし、カタツムリは人間にとって影響のない生き物であることから、研究者が非常に少ないといふ。それだけに県内に多数在住する協議会会員の協力のもとに行う調査結果は楽しみである。



夜行性で気温15℃以上十分な水分という条件が整うと活動し始める。広葉樹の古木や落ち葉・朽ち木・倒木の下を探せば簡単に見つかる。標本にするには水のなかにつけ、死んだら熱湯につけ堅くすると中身をピンセットで抜き取りやすくなるという。抜くとき回転しながらゆっくり抜かないと途中で切れてしまうので要注意。採集したサンプルは「日付」「場所」を書き、フィルムケースに入れて佐藤さん宛に送付。農薬、乾燥化、河川の三面張など画一的な環境変化によって激減した種類の報告があった。



<2005/5/29の研修テキスト>

陸産貝類(かたつむり)について

中根吉夫

梅雨時になるとカタツムリの姿がよく見られる。濡れた塀や生垣の枝をゆっくり這っていたりするが、乾燥しているときや昼間はじっとしていてなかなかこの姿は観察できない。

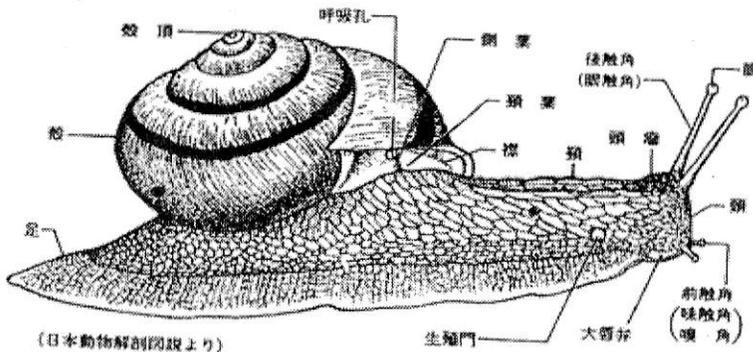
それは、カタツムリが湿気や水分を好み、夜行性であるからである。

いうまでもなく、カタツムリは貝で、水中生活をすべく進化した貝の仲間である。柔らかい体(軟体)を保護するために硬い殻が発達した。ところが貝殻を持つ「貝」にも二つのグループがある。一つはハマグリ・アサリ・シジミのように体全体を二枚の殻でおおっている仲間である(二枚貝)。もう一つは巻いた殻の中に内臓を収め、頭や足は外にだして水中を這い回る仲間(巻貝)で、カタツムリは巻貝に属している。

貝類はしたたかで住めそうな所へはどこへでも住もうとする。海で生まれた貝はやがて淡水に、その中の一部の貝は水から離れ陸上へ進出した。それは巻貝の仲間だけであった。

そのわけは貝も動物でなにか食物を食べなくてはならない。二枚貝は水中のプランクトンを吸い込んで食べる方式をとっているから水中でしか住めない。一方巻貝は、貝殻を背負ったまま腹足で移動して藻類などをおろし金のような形をした舌(歯舌)をもって、表面を削りとって食べる。そのため陸上へ進出ができたようである。このように陸上へ進出した巻貝の代表がカタツムリである。

頭と目は体の前方に、歩くための足(腹足)は体の後方に伸びている。頭には触角があり目もある。ところが大切な内臓を背中の殻のなかにしまいこんでしまったから糞の出口(肛門)は目の近くに腸を曲げてもってきた。本来は水中でのえら呼吸であったが空気呼吸に変えるため、頭の右側に呼吸口とその奥につながる袋をつくり、そこに細かい血管を張り巡らせて肺の役目をするものをもっている。



陸上生活をするカタツムリにとって一番恐ろしいのは体の乾燥防止である。そのためか粘液をだし保護すると同時に、昼間や乾燥しているときは軟体を殻のなかに閉じこめ殻口に粘液の幕を張りじっとしている。のんびりじっとしているカタツムリにも苦労があるようである。一般のカタツムリは雌雄同体で卵生である。冬は殻口に幕を張り落葉やがれきのなかの湿った所で冬眠をする。気温が 15℃前後なり、雨などで水分が十分与えられると冬眠からさめ活動を始めるようである。

普通殻を持つがナメクジのように殻を持たない仲間もある。殻を持つものは成貝では殻口の部分が厚くなり外へ反曲するが幼貝にはこの特徴がない。

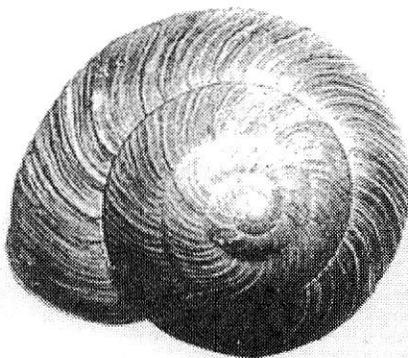
このような文化を持つカタツムリは日本に約 800 種、愛知県には約 150 種が生息していると考えられているが研究者により多少異なっている。

調査はカタツムリの文化を参考に、広葉樹の古木が多い湿気が確保されている所で、落葉の中、朽ちた倒木周辺、古木の洞、岩塊の隙間やれき土の中などを観察するとよい。その大きさは殻径 1 mm ~ 60 mm ほどで丁寧に調査しないと見落としてしまうことが多い。そのため微小貝などは落葉ごと明るい場所に運んで観察するとよい。この地方で身近な所に生息する殻径 30 mm ほどの右巻きの貝はヒラマイマイ(イセノナミマイマイ)で、畑や草叢に生息している殻径 10 ~ 20 mm ほどの薄い殻をもっているのはウスカワマイマイである。

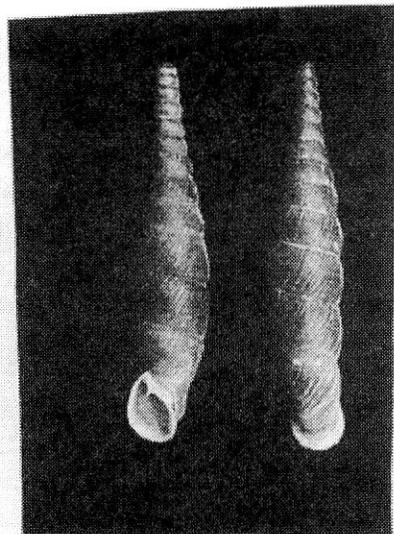
調査でとくに注意したいことは、採取した生貝を他地区に逃がさないように注意したいことである。その理由は、この仲間は移動能力が極端に弱く、各地で分離進化が進み、各地に特有な種や地方型を生みだしているからである。

分類には特別な指標があるわけではない。DNA 検査をすれば科学的で確実性が高いが普通では困難である。一般では、成貝の殻の大きさや形、模様や色、生殖器の形態、殻口の形態や蓋の有無などを総合して判断している。キセルガイ科では殻の内部にあるプリカの数や形態などが参考になる。そのため豊富な経験の積み重ねが必要である。

経験豊富な人に同定してもらいそれを見て習熟することが分類の手っ取り早い方法と思う。



ミカワマイマイ



クビナガキセル

全国里地里山大会 in 愛知県美浜町 報告

平成 17 年 5 月 14～15 日
知多支部 竹内 秀代

1 日目

美浜体育館のフロアーには、町内の里山に関わって活動する団体やグリーンツーリズムなどに関する活動状況がパネルや模型、パンフレットを使って工夫して報告されていた。

午後からは、満員の会場の中、開会セレモニーのあと CWニコル氏の「森のまんだら」という講演があった。自らの生い立ちから話は始まった。なぜ日本に来たのか、日本に永住することになるまでの経過の中にニコル氏の里山に対する考えや思いが感じられた。彼の育ったイギリス・ウェールズ地方は森林がほとんどないところだった。戦争のために切り出されたのだった。さらに大気汚染・水質汚濁などイギリスの自然環境は、今から 50 年ほど前はひどいものだった。しかし、現在は国を挙げて木を植えるなど努力の結果、確実に森林がよみがえりつつある。日本も、森林や里山の破壊が全国各地で起こっているが、みんなで木を植えれば必ず森林は再現できる。自分も長野県の妙高で、伐採されてしまった原生林のあとを買い取り、木を植え再生を試みているが年々木は生長し、森に近づいている。過去から学び、里山を再生する努力をしていこう。といった話だった。身振り手振りを交え、時には冗談を飛ばしながらの話は予定時間をオーバーするほど熱の入ったものだった。

ほかに、日本の里地里山保全活動コンテストで受賞を受けた、「布土地区里山クラブの活動」と、昔からの里山利用の点から「鶉の山での活動」について活動紹介があった。



2 日目

体育館東の「水野屋敷」前から町民の森メイン会場目指した参加者 100 人ほどを 8 つの班に分け出発。当日は、里山大会参加者だけでなく、名鉄ハイキングも同時開催されたり地元の当日参加者もいたり大変にぎやかだった。目的地のメイン会場広場には周りがテントで囲まれ、地元 J A の草もち・竹筒ようかん・キノコ汁・古代米おにぎり等、美浜の里山の味を味わえるだけでなく、竹炭、ガーデニング、木の実やつるのクラフトが体験できるコーナーもあった。メインはジョン・ギャスライトのショートトークのあと、一緒に里山体験という企画だった。ギャスライトは自らが日本に来るきっかけは海を渡ってカナダに流れ着いたゲタであること。履き物ばかりでなく木を様々に利用して生活してきた日本の文化はすばらしいこと。木や里山と関わって活動する中で、木は心をいやしてくれることに気づいたことなどをユーモアやアクションたっぷりに話した。その後、班ごとに自然観察をした。その中で自分の気に入った木を見つけること。あとで木の名札を作り、思い思いのメッセージを書いて木にぶら下げて残すということもした。観察会は短時間で忙しかったが、途中ギャスライトが参加者に声をかけるなどして、にぎやかなイベントとなった。もちろんあとで記念写真も一緒に撮った。

2 日間を通して、身近な里山には見方や関わり方を考えればだれにとっても魅力がいっぱい詰まっていること。そして、その魅力を発見し活用し始めている美浜町はこのごろ元気があるようだと感じた。



葉序 光を効率よく受ける植物の知恵

尾張支部 高谷昌志

1. 十字対生

ご存知の通り、一節ごとに葉(芽)が 90 度ずれて上下の葉が重ならない仕組みです。シソ科の茎が四角いことを触って確かめさせると結構受けます。

2. 三輪生

キョウチクトウが観察ポイント。葉は 120 度で三方向に出ていますが、一節ごとに 60 度ずれていますね。これは参加者に「発見」させるようにしましょう。

3. 互生

茎の回りをらせん状に芽が出ています。らせんの様子をよく見ると 2 周して 5 つ目や 3 周して 8 つ目、5 周して 13 など元への向きに戻る「法則」があることを確認しましょう。

冬芽は観察しやすいのですが、葉があると斜めの枝では上向きにねじれて分かりにくくなります。夏季は垂直のセイタカアワダチソウやタコサゴユリなどの草本で観察します。キャベツなどの野菜も 3/8 の葉序であることを説明するとさらに興味がわくようです。

3-2. 上級コース

らせん葉序の法則の解明です。2/5、3/8、5/13 らせんのそれぞれの芽の角度は 144 度、135 度、138.46 度であることは計算すれば、すぐ分かります。この角度はらせん生においてもっとも効率のよい黄金角 137.5 度の近似なのです。

137.5 度とは変な数字ですが、これは円 360 度を黄金比 (1 : 1.618) で分割した角度です。この黄金角でらせん生を続けると、一つの芽から見ると前(次)芽とは 137.5 度、前々(次々)芽とは逆回りで 85 度、前々々(次々々)芽は 52.5 度離れることとなります。つまり垂直方向に近い芽ほど水平方向に離れる仕組みなのです。137.5/85 と 85/52.5 も黄金比になることが「黄金」たる所以です。

芽は黄金角をめざして出るわけではなく、前芽や前々芽から離れた密度の低い位置を選んだ結果、必然的に黄金角になるのです。

3-3. マニアックコース

1, 1, 2, 3, 5, 8, 13, 21, 34... と直前の二つの数を足していった数列をフィボナッチ数列と言います。らせん葉序においてはフィボナッチ数しか現れません。松かさやヒマワリのタネの配列は左右数列の複合せんになっていますが、松かさは大抵 5 列と 8 列、ヒマワリは 13 列と 21 列、21 列と 34 列などやはりフィボナッチです。

これはフィボナッチ数列が基本的に黄金比 $\{(1+\sqrt{5})/2\}$ の等比数列であるからに他なりません。当然、黄金比を分数で表そうとすると 3/2、5/3、8/5、13/8、... が近似値になります。円を黄金比で分割し続けると、3 つ目毎、5 つ目毎、8 毎、13 毎に元に近い位置に戻りフィボナッチ数が現れるのです。なお、松かさやヒマワリも本来一重らせんで鱗片やタネは黄金角で出ているのですが、らせんの巻きが非常に密なのです。

説明不足ですが参考になれば幸いです。室内で観察会をすることがあったら、開いていない松かさやパイナップルなどで複合せんの列を数えることもネタになりますよ。(季節を問わずいつでも使える便利なネタです。)

名前でいこうか？それとも？

東三河支部 牧野 紀子

自然観察で生きものを覚えよう、と言うときには、名前を教えることの意義について何かと話題になることがあります。名を知ることの大切さがあることを言われる方、大切なのは名前ではなくて、自然の生きものについて感じることだと言われる方それぞれ見えることでしょう。

私自身は、名前を知ることが大切なことだ、と考えています。それは、単に「○△○」、という機械的な記憶で知るのではなく、その名前を言われる由来、その生きものの特徴と生活の有様、他の生きもの（特に類似種）との違いなどを知る扉になるためであるから、と考えています。

でもでも・・・小さな子どもたちを相手にするとき、複雑な言い回しの名前は、却って生きものに親しむためには困難になってしまうかもしれない、と息子との散歩で思いました。小さな子どもたちはまず草花を摘んだり、虫に触れたり、泥あそびしたりするところから始めるようです。そんな楽しみを何より優先させたい、と思いました。

ヒノキの実の形をサッカーボールにみたてて頃がして遊んだり、テイカカズラのツルをぶらんぶらんさせてみたり・・・等々就園前の散歩ではそんな遊びを沢山しましたよ。



庭に生えてきたマルバグミ

今年の春、大人である私は、近所にあった謎のグミの仲間を調べる機会を持ちました。図鑑を開いて調べた結果、マルバグミであることが判明。その後、このグミは豊橋～渥美の至る所で多く生息していることが分かり、類似のグ

ミ科の仲間との違いも明確に見て判るようになってきました。名前を識ったことで、新たな世界への道のりがまた一つ開けたわけですね。

伊良湖で再びこの植物と会ったとき、息子には、「これ銀色の葉っぱだね。」

と言ってみました。すると、熱心な、銀に輝くグミの葉っぱを探す息子の姿がありました！！

生きものの存在に気付くきっかけのための方法は、決して一つだけ、ではないのですよね。

そんな息子も、葦毛湿原でお会いした、豊橋自然歩道の方にスギを教えて頂いてから、その名と姿を覚えるようになりました。（ヒノキも覚ええました。）そろそろ、名前を教えてみても良いのかな？

◆ 豊かな自然セレクション 100 ◆

花の森、ヒメボタル舞う森 相生山緑地

レポート 名古屋支部 近藤記巳子

所在地 名古屋市天白区

概要 名古屋市天白区南部に位置する 123.4ha. が相生山緑地です。コナ・アベマキなどの雑木林・竹林に、田畑・果樹園・民家などが点在し、人と里山・里地のつながりが体感・学習できる貴重な場となっています。緑地の北 20ha. は、名古屋市のオアシスの森づくり事業の第1号として、1998年(平成10年)3月に開園。当緑地をフィールドに相生山緑地自然観察会(代表 近藤記巳子)が、1991年(平成3年)より定例観察及び調査・研究を行っています。(現8名のメンバー)

特徴 緑地の森は、本州の中部地方以西にみられるコナラ・アベマキ群集で、モチツツジなどの出現によって特徴づけられます。高木層として、コナラ・アベマキ・ヤマザクラ、亜高木層としてリョウブ・ソヨゴ・アオハダ・エゴノキなど、低木層としてモチツツジ・ヤマツツジ・コバノミツバツツジ・コバノガマズミ・ヒサカキなどがあげられます。また草本層ではサルトリイバラ・アキノキリンソウ・ワラビ・ヤブラン・シュンランなどがあげられます。

みどころ 四季折々の見どころを紹介します。

春、コバノミツバツツジの赤紫色の花が咲き、コナラが銀色に芽吹きます。続いてヤマザクラ・ズミ・カマツカ・アズキナシ・ヤマツツジ・モチツツジと咲き競い、まさに花の森です。

緑が深みを増す頃、森に明かりが灯るようにヒメボタルが飛び交います。森のホタルとも言われるように、水辺を必要としない陸生ホタル。ピーク時に黄金色の光が闇に煌く様は、まるで地上の天の川のようにです。深夜まで及ぶ調査の苦勞が癒されるひと時です。また、ヒメボタル観察の折には、タイミングよくホトトギスやヨタカの鳴き声を耳にすることも。カサコソ物音のする方角に目を凝らせば、タヌキと遭遇できるかもしれません。

「ここの名古屋？」 思わず確認したくなる風景が広がる



夏の暑い一日が終り夜の帳がおおりる頃、繊細な白い花が静かにゆっくり開きます。秋、真っ赤に色づくカラスウリの実を知る人が多くても、このレース糸で編んだような花を知る人は多くはないでしょう。それは夜にしか観察できない一夜の花だから……。鳴く虫の女王カンタンをはじめとしズムシ・エンマコオロギ・クツワムシなど、虫の音も楽しめます。1996年、アオマツムシは前年までは森の入り口までの分布を一気に奥地まで侵入しました。

秋、散策路を赤いヒガンバナが縁取り、薄紫色のノコンギクが咲き、ガマズミの実が赤く色づきます。ヤマザクラ・アカメガシワ・アオハダなどが森を彩ります。タカノツメのレモンイエロー色の鮮やかな黄葉は、ひととき目を引きます。また落葉した散策路を歩けば、甘く懐かしい香りに誰もが思わず立ち止まってしまうでしょう。

海を渡るチョウ、アサギマダラもふわりふわりと、秋の森を縫うように飛びます。昨年、私たち観察会のメンバーはチョウの翅に「ナゴヤ」の印をつけて放すというマーキング調査を行いました。この優雅なチョウが、どのようなルートで南下するのか、その生態を解明したいと思っています。

冬、すっかり木の葉を落とした林縁部に、カラスウリの赤い実が映えます。もし、この時期に枯葉をまとったままの樹木を目にすることがあれば、ヤマコウバシもしくはアベマキでしょう。静寂そのものの森をゆっくり歩けば、青い鳥ルビタキやジョウビタキに出会えるでしょう。展望台に上れば、白金の御岳山や鈴鹿山脈を望むことができます。

さあ、あなたならどの季節に尋ねますか。

協議会 25 周年記念事業について

担当 星野 芳彦

私たちの協議会も今年で創立二十五周年を迎えます。その一環で、各支部主催の観察会のスタンプラリーが企画され、私の所属する東三支部でも、先日、小坂井町でわき水をテーマにした観察会を開催しました。

さて、来る11月23日(祝)には一大イベントを企画しています。自然観察など屋外では様々な危険があります。しかし、それをよく知り、うまく付き合っこそ、よきナチュラルリストといえるのではないのでしょうか。そこで、「アウトドアと危険(仮題)」というテーマで、観察会などの野外活動で遭遇する危険とその対策、事故の予防について、専門家の基調講演、分科会などを計画しています。みなさん、奮ってご参加ください。

スタンプラリーが半分終わって

観察会担当 山田博一

4回スタンプラリーを係として参加してみると、担当が所属する支部の指導員はけっこう参加していますが、他支部からの参加は思ったより少ないと思います。

スタンプラリーの目的は、一般の参加者に多くの自然を見てもらうこともありますが、最大の目的は、多くの指導員に他支部の観察会に参加してもらって、今まで気がつかなかった他支部の観察会の良さを知ってもらい、指導員のつながりを作ることです。

私が18年前に指導員になった時の愛知県自然観察指導員連絡協議会の規模なら、1年に1度の総会と数回の理事会でつながりは維持できたかもしれません。しかし、これだけ指導員が増え、各自が成長して力をつけた今、総会や理事会だけでは、つながりは維持できません。「〇〇観察会」と文字は印刷されますが、その内容はわからないままです。

ネイチャーフィーリングが福祉と環境を融合させ時代を先取りしているすごい活動なのも、東三河支部がNPOとなり人材を上手に育てているのも、知多支部が行政と連携して信頼される観察会をやっているのも、実際に自分の足で参加して、自分の目で見ないとわかりません。

会長・理事が一生懸命やっていることが会員に伝わらず、行事がバッティングして、指導員同士のつながりが希薄になってきているのに加え、25年間の実績を持つ自然観察指導員連絡協議会より、2~3年で即席に養成された「鳥獣保護員兼県自然環境保全指導員」「自然案内人(インタープリター)」「里山活用マイスター」「森の案内人」「自然解説案内人」などの団体の方が有用され、自然観察指導員の存在自体が危うくなってきています。

愛知県自然観察指導員連絡協議会や各支部が、即席養成団体に埋もれないためには、力をつけることも必要です。そのため、個々の力量を高め「他の指導員の活動を、互いに理解し合い、指導員同士がつながる」ことが必要だと考えます。

スタンプラリーは、同じ自然を一緒に見て語り、一緒に昼食をして、他支部の指導員との交流を進める「支部間野外交流会」としての機能を持っています。さらに、他支部の観察会に参加すると、単に違った自然にふれあえるだけでなく、自分たちと違った観察会を学ぶことができ指導員の力量が高められます。

愛知県自然観察指導員連絡協議会という組織を無理なく存続するためには、理事会などの建物の中の会議より、支部の観察会に他支部が参加して、自然の中で楽しみながら集まり、日程の負担軽減を行って負担のない交流を進める必要があると思われます。

御都合のつく方は、残り5回ふるって御参加ください。

■ 理事会報告

2005/5/29 (日) 10:00~12:30

於名古屋市教育館 和室

出席者: 中西正 鬼頭弘 松尾初 石田晴子 井城雅夫 大谷敏和 近藤記巳子 齋竹善行 佐藤国彦 巾賢二 堀田守 山田博一 梶野代理: 間瀬

滝田久憲 星野芳彦

議長 中西正

記録 近藤記巳子

◆議題

0. 25周年実行委員会委員長として星野芳彦会員(東三河支部)が就任し、理事会席上を実行委員会とする旨が確認された。

1. 25周年記念事業について

①自然観察事業活動を振り返りつつ今後の活動の方向性を探ると共に、会員間の交流を図り、活動のPR・情報発信を行うことを目的とする。

②内容は、お祭りのことではなく実務的なものとする。

③基調講演は日本自然保護協会に協力依頼を求める。会員のみならず、スタンプラリー参加者など一般にも広く受け入れられる演題の魅力・工夫が必要になるのではないかと。

2. スタンプラリー中間報告

①山田観察会担当より、第1回の知多支部・第2回西三河支部・第3回尾張支部の詳細な取り組みのレポート報告が行われた。

②巾広報担当に、新聞をはじめとする各種マスコミにスタンプラリーPRに努めてもらい、参加を促進する。

3. その他

①石田会計担当より、7月中に徴収分を協議会口座への振込みの依頼。

②佐藤受託担当より、「海上の森自然観察ハンドブック」作成依頼あり、その趣旨・内容等の伝達が行われた。

2005/6/26 (日) 14:00~ 於ウィル愛知

出席者 中西正 鬼頭弘 松尾初 石田晴子 大谷敏和 齋竹善行 堀田守 山田博一 村上和彦 降幡光宏 三田孝 星野芳彦

議長 中西正

記録 齋竹善行

◆議題

1. 25周年記念事業について

○星野実行委員長から資料に基づき記念事業の企画案の提案があった。

○テーマは「アウトドアでの安全講座～屋外での危険とどう向き合い、つきあうか～」とする。

○基調講演の講師はNACS-Jの横山隆一氏を希望するが、誰がNACS-Jと話をつけるか、中西会長が近藤事務局長と相談する。

○基調講演に続くシンポジウムは、会員がパネラーとなって、一人15分程度で事例報告と問題提起をし、横山氏にも参加してもらい、会場からの声も聞きながら進めることとする。コーディネーターは星野実行委員長とし、パネラーは水難(梶野氏)、ハチ(平井氏)有毒植物(鬼頭氏)、ケガ(上等さん、又は佐藤氏、南川氏)にお願いする。(梶野氏には星野実行委員長が、平井氏には山田尾張支部長が、上等さんには松尾副会長がパネラーになってもらうよう依頼する。)

○シンポは、会員の他、子供を屋外で遊ばせる親などの一般市民も対象にし、自然の中には危険なものもあるが、こういう対応をすれば安全であるという内容のものにする。

○会場ロビーで、支部活動の紹介パネル展同時開催。

2. スタンプラリー中間報告

○観察会担当の山田理事から5回の実施結果について資料に基づき説明があった。

○スタンプラリーは支部間の交流という位置づけもあったが、これまでの参加者を見ると、地元指導員の参加は多いが、他支部の指導員の参加が少なく残念な結果となっている。残り5回に積極的な参加をお願いしたいとの意見が出された。

3. その他

○協議会ニュースに、愛知の自然100選を掲載予定。今後、具体的に執筆依頼をするので、協力をお願いしたい。また、11月号では25周年記念で増ページし、各支部からのメッセージもそれぞれ半ページほど予定しているので、協力してほしい。

○7月18日の研究会「学校における環境教育の指導方法」は、大谷理事が中心となって、中西会長、堀田理事、滝田支部長などの事例報告などで予定どうり開催。

○秋に実施されるNACS-Jの講習会の参加申し込み期間は8月8日から9月2日まで。

○協議会のPRリーフレットを5000部作成。各支部に600部、各理事に50部ずつ配布。活用を。

○10月30日に屋外研修を行うが、いい場所があったら大谷理事まで連絡してほしい。(支部間交流を考えるなら、今後、こういう機会を宿泊付きにすることを考えてもよいとの意見もあった。)

■ 年会費について



年会費は、愛知県自然観察指導員連絡協議会を運営していくための大切な資金です。

すでに、会員のみなさんには支部をとおして会費を納めていただいています。

「忘れていたあ〜！」という会員の方は、速やかに手続きをお願いします。

問い合わせは、

会計担当：石田 または事務局：近藤まで

■ 住所変更

◆ 長谷川努

〒491-0352

一宮市萩原町富田方字柳原 77-1

TEL (586)46-7368

◆ 松浦礼子

〒476-0065

名古屋市瑞穂区松園町2-14

TEL (052)834-0594



■ 連絡先などの変更は早めに

転居・婚姻などによる住所・氏名などの変更は速やかにご連絡ください。

また最近では住所表示変更も多くなっています。表示変更のみならず、郵便番号の変更も忘れないよう手続きください。

ことに注意が必要なことは、宅配会社のメール便は、郵便物のように転送システムがありませんので、その旨了解いただくようにお願いします。

発送担当のメンバーを、どうぞ戸惑わせないようお願いします。

～ 問い合わせに答えます ～

会員からの問い合わせに、以下の2件答えます。

■ 宛名シールの番号は？

Q. 「協議会ニュース送付の封筒に記載されている番号は、私の指導員登録番号ではありません。私の指導員番号は・・・」

A. 宛名シールには、マイクロソフトのアクセスを使って管理している関係上、**独自の「会員番号」**が表示されています。

アクセスは、重複のない値を「メインキー」として設定しておく、管理が楽なので、会員マスターに各会員ごとに「会員番号」を振ってあります。宛名シール作成や会費納入状況などいろいろなデータ処理を行います、この「会員番号」を使うことにより、会員の名前や住所は会員マスターに1回入力するだけですみます。したがって、変更があった場合などの修正が簡単になります。ということで、宛名シールの番号は NACS-J への登録番号ではありません。

まぎらわしいなら、宛名シールに「会員番号」を表示しないという手もありますが、問い合わせにこの番号を言ってもらえると、すぐに誰だか分かりますので、念のために表示しています。

(名簿管理担当：齋竹善行)

■ 調査・研究の企画を！

Q. 「協議会の活動として、調査・研究を」

A. 総会でお知らせしましたように、本年度は調査として、陸貝・ダンゴムシの調査を行います。5月には調査を寄りよいものにするための研修も実施しました。

研究については「学校における環境教育の指導方法」を2回実施します。名古屋地区と三河地区でそれぞれ開催しますので、会員の皆さんの身近な会場で参加いただけます。もちろん、両方の会場へ足を運んでいただければ、多数の事例を聞くことができますので、是非どうぞ！

※総会資料を参照ください

尚、調査・研究について、次年度も継続予定です。こんな調査を、こんな企画をという提案をお待ちしています。

(以上、事務局 近藤)



行事予定



研修会のお知らせ

開催日時	場所	テーマ	講師
7月18日(月・祝) 14:00~16:00	あいちNPO交流プラザ (愛知県庁東大手庁舎1F)	第1回学校における 環境教育の指導方法	事例発表 会員3名予定

7~8月の自然観察会スタンプラリーのお知らせ

開催日時	場所	集合場所	問合せ先	テーマ	その他
7月16日(土) 9:00~13:00	鳳来町 千枚田	千枚田看板前	小山 舜二 0536-35-0742 (東三河支部)	千枚田を見よう	交通:豊橋鉄道 バス停 滝ノ上
7月17日(日) 9:00~13:00	東山公園	東山植物園 正門横広場	滝田 久憲 052-782-2663 (名古屋支部)	湿地の自然	エコハルふるさと 親子と協賛
7月24日(日) 13:00~15:00	美浜町 富具崎港	名鉄野間駅 12:30	森田 博文 0569-87-0725 (知多支部)	海辺の生き物を 観察しよう	タモ・ バケツ持参、 サンダル禁止
8月21日(日) 9:30~12:00	南知多町 山王川河口	名鉄知多奥田 駅 9:00	森田 博文 0569-87-0725 (知多支部)	山王川河口の 貝やか=さん観察	テカギ・ バケツ持参、 サンダル禁止

スタンプラリーの趣旨は、愛知県各地のいろいろの自然を知ることが根底にあり、一般の方には、愛知県自然観察指導員連絡協議会の自然観察会に参加してもらい、観察の楽しさ・良さを知ってもらい、自然観察指導員には、多様な他支部の観察会に参加し、他支部と交流する機会等を設けることとしています。ご家族やお友達と参加してください。

詳しい情報は、直接担当が各支部のホームページで確認をして下さい。

東三河支部 HP <http://www5c.biglobe.ne.jp/~kajino/>

名古屋支部 HP http://cecile.gr.jp/nagoya_sizen/index.htm

知多支部 HP <http://www.japan-net.ne.jp/~chita-k/>

編集後記

梅雨の季節のはずなのになかなか雨が降らず、先日、气象台によれば今年の夏は暑くなりそうなお話をしていました。昨年は台風が日本各地を襲い、一昨年は冷夏の年となっています。環境が悪くなっているのでしょうか？

しかし、不安がるよりも身の回りのことから考え、できることをやり、また伝えていくことが大切だと感じています。もうすぐ夏がやってきます。この夏休みはどんな過ごし方をとりますか？

(稲生)

表紙絵:「里山の仲間たち」岩沙雅代

編集スタッフ

稲生 和久、岩沙 雅代、近藤 記巳子、齋竹善行、古川 俊江、苅川 真弓、松尾 初、横井 邦子

◎みなさまのご意見・ご感想など原稿をお寄せください。

尚、原稿は内容を変えない程度に加筆・修正することがあります。あらかじめご了承下さい。

協議会ニュース編集部

〒445-0863

西尾市葵町4-4 苅川 真弓

愛知県自然観察指導員連絡協議会 事務局

〒457-0006 愛知県名古屋市南区鳥栖2-6-17 桜本町 CH101

近藤 記巳子 Tel/Fax 052-822-7460